

## 農村コミュニティと電気通信メディアの受容 ～村民のライフヒストリーの作成をてがかりに～

代表研究者	安藤明之	東京経済大学大学院コミュニケーション学研究科・教授
共同研究者	川又実	NPO 法人地域メディア研究所・理事長
	上田裕	愛知学泉大学家政学部・教授
	山崎隆広	群馬県立女子大学文学部・専任講師
	牛山佳菜代	目白大学社会学部・専任講師

### 1 はじめに

1973年から2009年まで、ほぼ10年おきに岐阜県下の郡上村（調査のためのコード名）の全戸を対象に、5回にわたり調査票を用いたコミュニケーション調査を実施してきた。今回、すなわち2010年には、やや趣をかえて、全戸の悉皆調査ではなく、5人の典型的な村民（世帯）を対象にした「個人史」の聞き取り調査を実施した。「典型的」というのは、村の行政上の役職にあり、村民のリーダーとして村民から敬意をもってみられるS、H父子、女性として村の世話役を担っているMさんたちである。

そこで本研究は、個人史（ヒューマン・ヒストリー）ではあるが、同時にむらの歴史でもある。このむらというのは、江戸時代の庄屋、明治維新の戸長役場、町村制が敷かれて以降の町村長、2010年にこの地域の7ヶ町村を合併しての「郡上市」になって以降の行政指導者（市議員、市長）といった経緯をたどる。その政治的变化と、戦争、戦後の農地改革、高度成長期の減反政策、山林経済の崩壊などきわめてドラマチックな経済の変革、そして教育、娯楽、情報生活での革命である。

なお、本稿では、地名や実名については、プライバシー保護を考慮し、コード名、匿名を使用することとする。

### 2 調査内容

#### 2-1 目的・意義

この半世紀に及ぶ世界に類をみない継続調査は、東京経済大学の田村紀雄研究室（2004年定年退職）を中心にしたチームが実施してきたものをフォローし、2009年夏、（財）電気通信普及財団の助成を受け、第5次調査（2009年8月20日～24日）を実施した。

1973年、電話がまだ開通していない郡上村にて、第1次調査を実施した。続いて、第2次（1974年）、第3次（1993年）、第4次（2001年）と約10年ごとに同村を対象に継続的にフィールドワークを実施し、電気通信状況の変化、生活スタイルに及ぼす影響や、人間関係を社会的に検証してきた。特に第5次調査では、アンケート調査及び戸別調査の結果から、インターネットや携帯電話が村の生活に少なからず影響を及ぼしている現状が浮き彫りされた。

そこで本調査では、第5次調査で得られたデータや知見をベースにして、「郡上村」における電気通信メディアが人々の生活にどのように浸透し、影響を及ぼしてきたのか、これまでの調査対象者でもある村の「主婦層」を対象に、「生活史」を中心としたライフヒストリー調査を実施し、電気通信メディアが人々のコミュニケーションにどのような変化を与えていったのか、具体的に考察することを目的とする。

#### 2-2 調査方法・概要

IT化、モバイル化に伴い、農山村部の生活スタイルや、高齢者層、主婦の家庭生活における受け止められ方や意識、生活の変化についての継続的な調査研究は希有である。そこで、農山村社会・生活の変化を検討するにあたり、岐阜県下の小さな山村「郡上村」を対象として、1970年代より調査を開始した。1970年代の無電話時代から家庭に携帯電話・パソコンの普及が広がった2009年まで、およそ40年間の計5回の追跡調査を実施してきた。特に2009年夏に実施した第5次調査では、調査対象地域の現状に対する認識共有、調査分担の確定、調査対象世帯へのアポイント取りを実施し、各々の分担に沿って、調査対象世帯を訪問し、聞

き取りを進めた。合わせて、むらの生活史を把握・分析するため、80代の婦人を訪問し、詳細に聞き取りを行った他、自治会長への聞き取りも実施した。その後、調査票回収及び訪問調査実施世帯数を確認。調査対象となった76名中、61名から調査票を回収、45世帯に聞き取りを行うことができた。(聞き取りは、世帯ごとに行っているため、世帯でカウント。)

本調査研究では、前回実施した第5次調査結果を踏襲し、前回の調査では把握が困難であった村民と通信との具体的な影響について、戦後50年間の電気通信メディアが農村にもたらした歴史的背景を軸に、具体的に村民の生活を中心に、ライフヒストリーを作成する。

調査対象者の析出については、第5次調査結果から、ライフヒストリーと通信メディアの進化について、各々のライフヒストリーを振り返りながら、電気通信メディアが村に与えた影響を考察した。そして、調査対象者は郡上村の有権者名簿に基づき、第5次調査で協力いただいた調査対象者から、調査結果を踏まえ10名を析出し、そのうち5名から協力を得られた。

調査内容については、むらでの生活を軸として「村民間のコミュニケーションツールについて」や「村内人間関係のソシオメトリー(有力者との関係)」にはじまり、「通信機器が村に導入された頃について」、「電気通信メディアの利用状況」など、これまでの電気通信メディアの受容について、村民のライフヒストリーとあわせヒアリングした。

また、この半世紀に村に電話が導入され、主産業の林業がうちすてられ、町村合併がおこなわれ、高速道路が開通し、コンビニ中心の消費生活の影響を受け、高齢化、少子化が進行していることなど、村の歴史、経済、通信、交通、生活などについて具体的にヒアリングした。

### 3 調査事例

#### 3-1 F家Sさん

##### (1)「むら」の様子

「むら」という用語は定義しておかねばならない。行政上の「村」も明治維新以降の「村」も戸長村、町村制施行以降の「村」、戦後の地方自治法以降の「村」、郡上村もまきこんだ2010年4月以降の「平成の大合併」によってできた「村」と、江戸時代以降も連綿と続く「自然むら」と区別しなければならない。このわれわれの調査でいう「村」とは、ほぼ後者にちかい。行政上はいくつかの「大字」をふくむ。また、第三の使い方として「うちのムラ」というように、近隣(ネイバーフッド)を漠然と指す場合がある。

郡上村のなかほどの集落に住む農家で、230年前の明和年間に、同じ郡上郡のひと山こえた集落から移り住んだと記録にある。この郡上村でもっとも古い居住者は「K」家である。Sさんは、この村へきて9代目、子のHさんが10代目、その長男が11代目になる。

F家は、郡上村へ移動する前のむらでも「在所で庄屋」だったという。しかし「5代目が、S神社へいって神官の資格をとるなど、全国行脚18年で、途切れ、大正3年に再健する。F姓は、飛騨のF、そこからの移住、その本家から6代目がいまの土地に分家してわかれた。両者は同じ郡上村だが、1キロほどはなれて生活を建てた。

なお、本家は、岐阜県内でも有数な大山林地主として知られているが、ここ10数年の木材不況でかなりの打撃をこうむった模様である。40年前に郡上村ではじめて調査が開始されたとき、本家の権勢は飛ぶ鳥をおとすほどであった。数千町歩の山林を所有し、郡上村100戸のほとんどが、山林に依存して生活していた。電話回線が個人としてひかれているのは、この本家だけで、それ以外にも、村で最初の複写機を備え、製材、木場、販路を維持するため相当数のトラックなどの自動車を所有、村の男性多数を雇用、伐採、運搬、製材の仕事に就いた。女性はヤマの下刈り(雑草刈り)、小枝取り、苗の植え付け、雑役の仕事に雇用した。

##### (2) むらと山林

しかし、輸入材が増えて、木材産業は打撃をうけ、村びとがヤマにはいらなくなったのと歩をあわせて、里山にまで猪、猿の大軍が押し寄せ、庭続きの畑まで荒らすようになった。奥山の動物の世界が、里山の人間活動によって維持されていた境界線が村にさがってきたのだ。林業の不振と逆に、自動車産業などの工業製品の生産が拡大して、若いむらびとは、下流の関、美濃、名古屋方面に工場労働者の職をみつけ、また郡上郡のなかにもその下請け工場が多数生まれて、残余の男子や女性もそこに転職する時代をむかえる。

Sさん宅は、郡上村という山村で独自の家計設計をしてきた。庄屋の家系でもあるF家は代代、むらのリーダーである。そのような自覚もつよい。むらびとは、「昔は、どこでも山だけで食えたんや」、「そう教育せんでもいいと、とにかくまじめで働くことさえておれば、ここで食っていけると、主に炭焼きが大事だ

った」。

大正時代から、昭和3年ころまで、炭焼きの仕事はあった。「昭和6年ごろ初めて汽車が来たのかな」。炭を鉄道で出すようになった。

まだ、敗戦後は木材用の樹木は育っていなかったので、「梅や桐、ひとりはえの杉やヒノキ」といった雑木で炭を焼き、馬車や木馬で出荷したため、量もしていた。炭は、郡上村の谷間をくだり「こうのはら」という長良川に合流する河岸までおろし、そこから美濃市まで筏に組んで運搬した。

その後、都市での材木需要が高まり、切り払われた雑木のあとに、建築材向きの杉や檜が昭和25、6年ころから、30年代にかけてどんどん若木や苗木が植えられた。若木は5、60年育てれば伐採できるということだった。「明治時代に植えておらんと、昭和初期に植えたものでは、切れるまでになっているものはないがな」。

戦後植えて、山にてをいれて大変な4、50年を経て、「50年ほどたって初めて成木になって金がとれる。が、それまでに皆いかれてしまう」。結局、植林が商品化する前に、バブルがはじけて大方の農家は失敗する。戦前からのヤマもちの一部の大地主を除いて。

### 3-2 Mさん

#### (1) むらの仕事と生活

Mさんは4反の田んぼを持つ。収穫しても出荷をするわけではなく、全部自家消費になるという。野菜は全く作らず、買ったり近所からもらったりしている。最近では、田んぼに、ハクビシンやイノシシあるいは猿が来て被害を加えるようである。イノシシについては「イノシシのおりが入れているんや。おりをひっくり返すほどなんやで」、動物の生命力はかなり強いようである。田んぼの周りには電気柵が設けられているが、人がさわるとビリビリくる程度で、動物が死ぬほどではない。

Mさんは、以前森林組合に勤めていた。この付近の山一帯は広くFさんが所有し、管理している。Fさんと森林組合の関係については、「ないです。Fさんは、今はそんだけの助成金がないでなんやけど、20年代ほどえらい国からの助成金が多かったもんで、個人でやっておられたんです」という。森林組合の仕事は、「伐採もやりました。けど、ほとんど調査が多かったです」。続いて「そうすると、Fさんが個人で山を維持していて、そのほかの人たちは森林組合に寄っていたわけですね」、それに対して「そうです。けど、今は助成金が少ないもんで」と現在でも森林組合は存続しているが、少し事情が異なるようである。これについてMさんは、「今はもう30年、40年ぐらいの木材なんか本当に安いもんやで、採算が合わんです。Fさんは80年以上たった木やもんで、6人ぐらい作業員がおるのかな。それでやっていけるんですが、50年以下やったらもう……」という。50年以下の木材は、丸太で道の駅の隣の集積場に集められ、用途によって振り分ける。そこからトラックで製材所などに出荷するようになっていく。Mさんは、山をあまり持たないが、一応森林組合の組合員であり、サラリーマンのように勤めていたようである。

昔はこの付近のほとんどの人が林業にたずさわっていた。「昭和20年代なんか、全部炭焼きが多かったな。30年代になるとぼつぼつ若い人が勤めに出て、今ちょうど60歳以上ばっかやわ、勤めに出た人が」。勤めはここから自動車を通う人が多かったという。

#### (2) むらの通信手段と利用

この村の電話機は有線放送と一体となった機種が、ある時期一斉に導入された。多くの村民は、一般の電話のように「用事のあるときだけかけたり、かかってきたり」している。有線放送は、納税日や健康診断のお知らせのように行政からのお知らせなどそれなりに役に立っているとのこと。携帯電話の必要性については、「携帯電話なんか、この電話がありゃあ、携帯電話みたいなのは必要ない」といっている。パソコンについては、「パソコンは若い人がみえる家は使っていますよ」、「うちらは年寄りやで、パソコンはわからん」といっている。

「電話とかが普及することで、かえって親戚づき合いみたいなものが疎くなったというようなことはありますか」について、「そんなことはないです。ただ、今はそれぞれの家が独立しておるような感じやな。それで、助け合うというようなことはないです」といっている。また、テレビについては、「昔、テレビなんかが入ってきたときは、どっかのうちでテレビ入ると見に行っただけなんやというのがありましたけど、そんなことはあったんでしょうか」。これに対して、「ここらは一斉に入れてまったんやで、結局共聴になったもんで」といい、電話と同じようにほぼ一斉に導入されている。ただし、最初の電話の導入は外部と通信することができない、村内だけのものである。

### 3-3 K さん

#### (1) むらの信仰

K さんの家は郡上神社の氏子である。役員さんが月例祭をやっているけれども、キヨコさんのような一般の人はあまり出ないそうだ。大祭も同じで役員さんたちがやっていて、一般の人は手伝うことはないということだ。氏子としてお金を払っているだけで、行事を運営したりするという意味での信仰は無いようだ。だがウナギの信仰はあるようだ。むらに代々住んでいる人は食べないからウナギの味を知らない。「だけど、あんなおいしいものはな。本当のことを言うと、それはここに前からずっと住んでみえた人は、その味は知ってみえないで、わかってないわね」。

ここ郡上川のウナギは昭和の半ばまでは大量に生息し、大正 13 年には「うなぎの群生地」として国の天然記念物にも指定されている。昔はウナギがたくさんいた。「私は来たときは本当に出ました。うちでもエサを売ってましたから、サナギを持って行って揉むと、何にもおらんところからこうやって出てきましたよ。あれは不思議です」。ウナギについてはこんなエピソードもある。「川におひつを、おひつってわかりますかね。ご飯を入れるあれにまだご飯粒がついているもので、それをふやかしているとウナギがそれを食べに出てくるんですよ」。そのような情景の写真が資料館の『郡上村ふるさと館』にはある。

ウナギが突然少なくなったのには言い伝えがあるそうだ。「一時私が来て何年でしたかしら、ササが枯れるときが、何年か私も覚えていないが、ササの花が咲いて、その花が咲くと川の長いものが死ぬというあれがあって、やっぱりこのウナギもすごく死にました。白くなって浮いてきて、あれで大分死んでしまったようです」。上流に工場等は無いので水の汚れが原因とは考えられない。

このウナギは、川へ下っては行かず、この川で冬を過ごす。「うちの主人がまだ若いときなんかは、夜、ウナギがとりやすいもので、よその人が入ってくるもので、その夜回りがありました」。ウナギ泥棒の対策としてむらでは、消防団が夜回りをし、ウナギを大事にしていたということだ。しかしウナギが減ったのは、台風の水害があつてから、川が浅くなり深みが無くなり、川が変わってしまったからだと考えているようだ。

K さんがこのむらで暮らすことになったのはむらの祭りと関係があつた。K さんが 25 歳の時、主人と見合いで結婚した。村の神輿を、自分が生まれた家の前にあつた仏壇屋に、自分のいとこである使用さんが修理に持ってきた。嫁がないという話が出て、近所の人があそこの家に年頃の人がおる、ということになった。「お祭りの神輿が取り持ちの縁みたいなものだ」と言う。

#### (2) むらと通信メディア

K さんのところでも電話は玄関近くに置いてあり、むらの情報が入ってくる小口機もおいてある。村ではどこの家も玄関に置いていところが多いそうだ。K さんが嫁いできたときには、家にまだ電話は無かつた。1980 年頃に電話を引いたのだが、電話が来たときは、世界が広がって明るくなった感じがしたそうだ。そのとき K さんは、自分の実家には電話はまだ無かつたけれども、電話がついた後でも、実家は義理の姉がいたので電話はしなかつた。兄弟に電話することが多かつたそうだ。

携帯電話は、息子夫婦と夫が使っているが、一人ずつ持っている訳ではない。2 台をうまく使い分けている。孫も当然持っていない。K さんは出かけるときに持って行くそうだ。

パソコンは夫も息子もしない。「これからは孫にやってもらおうだろう」という。

こういった携帯電話やパソコンなど IT 機器は、個人の道具というよりは、家族の道具として共有し、むらの生活に合わせうまく使いこなすことを心掛けているようだ。

K さんの現在の家庭生活は、貧しさゆえの強い連帯感ではなく、家族の強い信頼感のもとで協力し合っている姿がイメージされる。またこの家族を軸とした生活が、むらとその周辺の地域社会で完結しているといえる。

むらに電話や IT 機器が導入され、道路ができたり、郵便局が無くなったりして生活環境が変化していくとともに、むらの人たちとのつながりは、「ウナギを食べない」などむらの決まりを守るといった面では強く、行事や儀式などでは協力を求めにくいという点ではそうでない面があるようだ。

しかしむらは、境界を変え、姿を変え、人間関係を変えつつも、生き残っている。これからもどのような変化のもとでどのようなむらになっていくのか興味は尽きない。

### 3-4 F 家 I さん、M さん

#### (1) むらと林業

このむらの歴史は古く、生涯に 12 万体の仏像を彫ったと伝えられる江戸時代の行脚僧円空 (1632- 1695 年) も、この地に縁の深い人物である。現在その円空の遺志を継ぐ神主の方は代々の世襲で 39 代目となり、

Iさんは49歳の頃からその補助的な役割を務めている。この地がお宮としている神社のしきたりは厳格であり、毎月の月例祭も必ず決まった日付で行われているようだ。神を祀り、神に仕えてきたむらの系譜を、Iさんは正統的に受け継いでいる存在と言えるだろう。

かつて、この地区の伝統的な産業といえば、林業を代表格に養蚕、炭焼き、そしてお茶作りなどであった。そもそもIさんが生まれ育ったF家は薪炭業者で、一時は50人ほどの従業員を雇用して一財産を築いた。初代のおばあさんがしっかり者で、薪炭で財をなしたのだという。加えてIさんのお父さんは歌人でもあり、短歌や詩をたしなみ、靖国陣社などの歌会にも入選するほどの腕前だったとのこと。商才と風雅さ、そしてリーダーシップを併せ持ったF家の家柄が伺われる。

だが、近年は林業など一次産業の景気はすこぶる悪く、Iさんのお孫さんご夫婦も家業は継がず、二人とも公務員（教員）なのだという。Iさん自身も、自宅の林業ではなく、県から委託された仕事や神事関連の囑託の仕事で収入を得ているというのが実情だそうだ。

そんな状況下でも、Iさんはじめ、いまだ田畑を手放さず、耕し続けている人は多い。「米は大変つくっておりますから。どえらい余るぐらい」。余った分は供出はせず、誰かにあげてしまうことが多いのだそうだ。自分がカネを稼ぐためばかりではなく、皆がむらで助け合って生きていくために労働していこうとする点にも、Iさんならではのリーダーシップが感じられる。奥さんも2反ほどの土地で野菜を耕しているが、こちらの方は野生のサルに食べられてしまうので、最近はや外で買ってくることのほうが多いのだそうだ。

「一番僕が心配するのは、植林ですね。今はいいですよ、水はたぶろくある、植林してね。幾ら照っても水はあるでね、これは木のおかげですな。でもこれもはげの山やったら、水は切れてまって、こんな清泉な水は出ませんで、これは植林のおかげですから。水が豊富にあるということは山の植林のおかげですけど、ますます木がしとなってまうでね、これから。杉なんか、もう70年も置いたらこんなもんですでな」。

無計画な伐採計画が環境破壊を招き、一方カネにならないからといって植林政策を安易に転換してしまうことで生まれる危機を、Iさんは危惧している。山や木に対する愛着を語る一方で、いくら切っても市場で値のつかない林業関係者のジレンマを、Iさんは切々と説明してくれた。

「とにかく市で小美林作戦で、今環境をよくするために、外部の家の近いところとか近所を切ってしまうでしょう。この間も切ってしまったね。あれ、市からどえらい援助をもらっておるんですよ。それで、わしも随分切ってあげたけど、結局切り賃は出していただいても、市場へ出しても、持ち運び、運搬賃、手数料、それに全部取られて、自分の懐へ入るところはゼロというか、ささいな金、涙金。こんなもんに自分で費用を出したら、もとの切り賃から何も無い、大赤字ですよ。まあ、木みたいなのはだめです。ひどい植林ですぞな」。

かつてはむらの収入源であった林業が、無計画な植林政策によって混乱させられ、そして時代とともに需要が減少することによって今度は伐採を命ぜられる。流れる時の狭間で翻弄されざるを得ないIさんの悩みは深いようだった。

## （2）むらとメディア生活

IさんMさん夫婦も、パソコンや携帯電話は使用しないが、息子や孫達はそういった最新機器は当然のように全て利用している。年老いたご夫婦にとって、メインとなる外部への通信手段というよりはやはりむら中に巡らされた有線電話となるようだ。決まった番号を回せば、この一帯に限ってはいまだ無料で通話が可能である。地上波デジタルテレビも早々に契約したが、それほど気にかけているわけではない。

人里離れたこのむらとはいえ、携帯電話もインターネットも地上波テレビも、むらと外部を繋ぐインフラストラクチャー＝メディアは既に一通り揃っている。高齢ゆえに最新のメディア機器を使いこなすことが難しいという事情はあるにせよ、それらを使わなくてもIさんやMさんの生活が特段に不便を被っているという印象は受けない。それは、このご夫婦以外のご家庭を訪問した時にも感じたことである。何故か。

むらの多くの家庭生活の中心に共通して在るコミュニケーションメディアは、いまだ各家庭で毎日利用されている有線電話である。むらの人々は、このメディアから流れる情報に日々耳を傾け、明日の天気や、むらの催しや、近隣の知人たちの健康具合を知る。逆に言えば、ダイヤル一つで自由にやりとりをすることが出来るこの有線電話が画定するコミュニケーション区域が、むらのコミュニケーションの「場」となる。

他の地域から隔絶され、閉じているというわけでは決してない。このむらのメディア機器の普及状況を見れば、むしろ積極的に新たなメディア変容を受け入れているといってもいい。しかし、時代の潮流にいたずらに翻弄されず、必要なものは取り入れながら自分たちの生活を守っていこうとするむらの姿勢の象徴として、この有線電話は存在しているように見えてならなかった。

玄関先で行われていた取材の最中、むらの役場からのお知らせを流すスピーカーからの声が、家の中そし

て屋外からも同時に鳴り響いた。この放送はこの集落一帯に全て共通して流されている。

### 3-5 F 家 H さん

#### (1) むらと少子化

周辺地域でも、65歳以上の老年人口の増加のいっぽうで、0～14歳の年少人口、15～64歳までの生産年齢人口の減少は顕著である。特に、20～24歳までが特に少なく、子どもも減少し、今後急速に高齢化が進行することが危惧されている。Hさんの学生時代には、周辺集落あわせ「150名の同級生がいたが、現在では20名台」であることから、郡上村周辺地域でも少子化が進行しているようである。しかし、郡上村では、極端な少子高齢社会ではないという。その理由の一つに、親子で一緒に住んでいる家が多く存在しているからである。Hさん宅のように3世代、4世代一緒におなじ釜の飯を食べている世帯は少なくなってきたものの、それでも2世代いっしょの世帯は多い。その証拠に一軒の間取りは部屋が多く、玄関に土間がある家も多い。また1965（昭和40）年頃、それまで郡上村では藁葺き屋根の家が主であったが、ほとんどの家がそれ以降改築し、現在まで築40年以上たっている家も珍しくない。さらに、庭が広い家などは、隣に息子夫婦の家を建てることができ、住まいは別であっても、食事は一緒にとる家庭もまだまだ多いようだ。

郡上村では、職場や学生時代の同級生などと結婚するケースが多く、遠方から結婚相手を見つける傾向は現在でも希である。これは、2009年に実施した「第5次郡上調査」の聞き取り調査結果からも、郡上村周辺から嫁いでいるケースが多かったことからわかる。一方、現在では郡上村では、30代から50代の特に男性独身者が、約1割から2割を占めている状況にある。このような状況下で、行政として何か対策はとっていないのか。

結婚促進対策として郡上村周辺集落では、中国や台湾、フィリピンといった国々から紹介者を通して国際結婚をしているカップルは数件存在するという。現在では郡上村では国際結婚といったケースはまだないが、郡上村でも今後国際結婚が増えていく可能性はあるようだ。

国際化は、観光業にも影響を与えている。国際化の重要なインフラは、中部国際空港である。「中部国際が。あれで非常に郡上というのは便利なんですね。空港をおりて1時間ちょっとでしょう。こんなところはあんまりないですよ。だからもっともっと誘客をということで、今、年に620万ですか、観光客が訪れていますけど、その中の特に中国、台湾、韓国の方が多くなっていますね」。岐阜県には、世界遺産白川郷合掌集落をはじめとする観光スポットや郡上踊りや高山祭りなど、日本伝統を継承している文化遺産も数多く存在し、国際空港から約1時間でアクセスできる立地条件あわせ、外国人観光客の増加も見込まれる。

#### (2) むらびとの交流

郡上村では、地域の結束力が強く結婚率が高いのも、少子高齢化に歯止めをかけている理由だとHさんは答える。これは、郡上村商工会青年部が発行している「郡上村電話帳」の記載で確認しても、郡上村では夫婦二人だけの記載は少なく、一世帯あたりの記載人数は、ほとんどが4人以上の世帯で記載されている。これは、前年の悉皆調査でも同じ傾向であった。

では、具体的にどのような取り組みが行われているのであろうか。15年ほど前までは、野球やソフトボールといったスポーツでの交流を通して、毎晩のように汗を流していた。最近では、ゲートボールとかグラウンドゴルフといった、シニアクラブが活発に活動を行っているいっぽうで、婦人会が2010（平成22）年3月に解散した。

いっぽう、毎月の月例祭や4月に行われる大祭、自治会単位での集会在、年に4、5回開かれたり、夏祭りや盆踊りなど、昔ながらの祭礼行事はむらびとの購入行事として、現在でも残っている。また、若手の会である「一里会」があり、2009年実施された、「第7回日本山村会議」での中心役を担った。

この「一里会」は、長良川から県道の奥になる郡上神社までの距離、約4キロにちなんでつけられた会の名前である。この会の前は「十五日会」と呼んでいたが、Hさんらの世代を中心に、平成元年、当時の20代から40代がメンバーとなって、この「一里会」と会名を変更した。

「昔からみたらずうっと減っていますが、まず祭礼が毎月ありますよね。そうして月の自治会単位の集会在が年に4、5回、それからこの間、盆の13日の晩に公民館活動がありますね、それでいろんな行事をやるんですよ。それで夏祭りをやって、皆さん集まってきてバザーをやったり、一杯飲んで、盆踊りをして交流をしたり。それであとはいろんな、ここはまだ残っているんですけど、昔ながらの祭礼行事、例えば秋葉様の祭りとか、いろんな八王子まつりとか、そういう祭りのときに寄る機会かなあと思っています。もう一つは、最近薄らいでいるのは、この間もちらっと話したけど、一里会という会があって、それは若手の会なんですけど、これがもともと地域おこしの会やったんですけど、だんだん皆さん忙しいんかわかりませんが、

どうもその辺も低下してきているんで、だんだん村そのものの元気が僕はなくなってきていると思うんですよ。ここのところで、この間もちらっと話しましたが、今言われるのは、やっぱりみんなが少しでも暇があれば寄る機会をつくって、意見交換をしながらどうしていいかというものを持っていかないと、だんだん寂れるのと水臭くなると思っていますから、もう少し元気を出していきたいなと」。

そんな思いがある中で、2009年9月19日から21日までの3日間、郡上村を会場とした「第7回日本山村会議」が開かれた。これは、2年に1回全国各地を会場とし、山村の体験を知り、山村のありかたを考えことで開催されている会議である。そこで、郡上村が第7回会議の会場となったのだが、この3日間に、全国から約100名近くの参加があり、地元住民も約150名加わり盛大に開催された。山の仕事や村での生活といった郡上村の生活体験のほか、修験道、行場巡りといった、郡上神社や円空にちなんだ村独自のプログラムなどが用意され、それぞれむらびとが中心となり、参加者たちに村の魅力を伝授した。

このような催しが行われ、月に一度行われる星宮神社の月例祭を中心に、むらびと同士の交流が現在でも続いているが、15年ほど前までは、野球やソフトボールでのスポーツ交流も盛んで、ナイター設備のグラウンドも3つ造られ、毎晩練習や村同士の対抗試合なども頻繁に行われていたという。

しかし、婦人会が解散されるなど、現在では地域交流も減少傾向である。これは、女性の社会進出により、若い世代が仕事で村外に働きに出て、生活スタイルの意識変化が一因であり、その変化は冠婚葬祭でも、この2、3年で業者に依頼して執り行われるケースが増えてきているという。

「冠婚葬祭の葬の部分ですね。これが前は亡くなるとみんなが寄って、料理をつくったりやったじゃないですか。それがここ近年になってきて式場になっちゃうんですね、ほとんど式場。そうなると思えば何もする必要がないですよ。それが大きく変わることにになりますよね。(中略)ほとんど8割、9割方式場になっちゃいましたね、ここ2、3年で」。

日頃の生活におけるむらびと同士の交流の場が、ひとつひとつ薄らいでいく中で、人びとの他者とのつながりも希薄になっていく、そんな社会がここ郡上村でも現実味を帯びだしてきている。

#### 4 おわりに

この村も日本の一部であり、その政治、経済、社会の変化からのがれることできない。町村合併しかり。減反、材木の輸入と山林の放置、田畑への野生動物の侵入、東海・北陸間の高速道路の開通、その他の公共施設の課題、少子化や高齢化、電話、放送、その他の通信、新聞などの活字媒体の変化、零細商店の衰退と消費生活の問題、これらは、この郡上村にも表れている。しかし、むらびとは創意、工夫、自然や伝統の維持、家族の協力がひきつづき維持され、「限界集落」を格別に騒ぎ立てる状況になっていない。

家族の絆を大切に、むらびと同士のタコソバ化現象を防ぐためにも、これまでの伝統行事を守り、地域交流を図り、お互い困ったときには一致団結し助けあう、そんなむらびとの思いがこの調査を通して感じられた。

この郡上村で長年調査を実施することができたのも、また、我々のような部外者を快く受け入れ、長時間インタビューに答えてくれたのも、郡上村の人びとに人と人とのつながりを大切にする心の温かさがあるからではないだろうか。そんなつながりを大切にするフィールドをいつまでも守り続けてほしい。

#### 【参考文献】

田村紀雄『コミュニティキャンペーン』、サイマル出版会、1977年。

田村紀雄ほか(2002)「『郡上村』のコミュニケーション生活——『電話化』から30年 第4次調査報告」、『コミュニケーション科学』第16号、2002年3月。

田村紀雄ほか(2002)「フォーラム『郡上村』電話化の30年間」、『学術研究センター年報』第2号、2002年5月。

安藤明之ほか(2010)「第5次『郡上村』調査からみる地域社会とコミュニケーション」、『コミュニケーション科学』第32号、2010年3月。

〈 発 表 資 料 〉

題 名	掲載誌・学会名等	発表年月
研究発表「第6次『郡上村』調査報告	NPO 法人地域メディア研究所 研究会	2010年10月
報告書「現地報告」	—	2011年3月
研究発表「山村コミュニティにおける情報メディアの受容」	日本社会情報学会 2011年大会	2011年9月
研究論文「第6次『郡上村』調査とむらびとの個人史	東京経済大学『コミュニケーション科学』	2011年10月（予定） *掲載決定済